

# 博士論文要約

平成 27 年 6 月 23 日

小泉 京美

論文題目 一九二〇年代から三〇年代の前衛詩運動と満洲における日本語文学の研究

本研究の目的は一九二〇年代から三〇年代における日本の前衛詩運動と満洲における日本語文学の結び付きを大連で興った短詩運動を媒介に検討することである。

日本の前衛詩運動は美術など他の芸術ジャンルと連動しつつ、総合的な芸術運動として展開したが、その展開はこれまでヨーロッパにおけるアヴァンギャルド芸術運動の移入や受容という側面から捉えられる傾向にあった。だが、日本のアヴァンギャルド芸術運動が、実践的に波及力の圏域を拡大していく直接の契機は関東大震災にあり、さらにその後の植民地膨張という政治的与件に規定されている。本研究では日本に固有の文脈において前衛詩運動を捉え直すことでその表現の本質的な解明を目指した。

日本の近代詩が直面していた歴史的課題について考える際に、一九世紀末から二〇世紀初頭に出現する東アジアの植民地（租借地）という場は、看過することのできない重要な問題を孕んでいる。これまでの前衛詩運動の研究において、『亜』（一九二四年一月創刊）の短詩運動は『赤と黒』（一九二三年一月創刊）を始めとする関東大震災前後の日本の前衛詩運動の流れを汲み、『詩と詩論』（一九二八年九月創刊）を中心とする新詩運動の前史として捉えられてきた。

しかし、『亜』の短詩運動が、日本の租借地であった中国の都市、大連で興ったことを重視するならば、世界同時多発的に興ったアヴァンギャルド芸術運動の波が、地理的環境を越えて日本に及び、さらに日本の地方都市や「外地」の都市にも及んだという影響関係のみでは捉えることのできない側面が見えてくる。その一つは、日本の近代詩が伝統的な韻文の形式や発想から脱却する際に、植民地という両義的な場を必要としたというジャンルの成立をめぐる本質的な与件の問題であり、もう一つは「内地」の前衛詩運動の文脈を離れ、独自の展開を遂げた「外地」の文学的営為をどのように日本近代文学史の中で捉えるかという問題である。

このような問題意識に立ち、本研究では前衛詩運動の歴史的経緯に留意しつつ、「内地」との影響関係に限定されない『亜』の独自性を、日本と満洲の地政学的関係に目を向けることで検討した。その上で、『亜』の短詩に形象化されている安定した言語形式の揺らぎを、植民地の風景と日本語や日本文学の形式との葛藤という観点から考察した。

関東大震災以後の日本の前衛詩運動は、政治からの自律を標榜して芸術性を追究する動きと、革命のための芸術を旗印に政治的に先鋭化していく動きが交錯しながら展開する。弾圧や転向を体験した前衛詩運動の担い手の幾人かは一九三〇年代に満洲へ渡った。満洲事変から日中戦争に至る過程で、満洲では「五族協和」や「王道楽土」の理念を掲げた「満

洲国」に、新しい理想的世界の実現を夢想するロマン主義的な文学運動が勃興する。同時に『亜』の短詩運動が依拠した満洲（大連）という場の独自性は、『亜』の終刊後も満洲の日本語文学の底流に潜在し続けていた。このような多元的な文化状況と地政学的な文化戦略を読み解きながら、日本近代文学における満洲という場の独自性を検証した。以下、各論の概略を述べる。

第一部では一九一〇年代後半から二〇年代にかけての詩と美術の相互交渉に光をあて、詩と美術の協働や葛藤について論じた。既存の芸術ジャンルを越境して総合的に展開したアヴァンギャルド芸術運動の歴史的経緯を明らかにすることと、洋画や俳画の影響を受け、詩の純粹化の過程で逆説的にも絵画表現へと接近した『亜』の短詩運動との連続性を考えるためである。また、一九二〇年代の前衛詩運動を、ヨーロッパの芸術思潮の移入や受容としてではなく、関東大震災という固有の文脈から検討することで、その表現の特徴を明らかにした。

第二部では短詩運動と植民地の想像力との結び付きについて論じた。まず、短歌・俳句・川柳などの文脈から展開した短詩運動の歴史的経緯を整理し、『亜』の短詩運動が伝統的な形式との葛藤や交渉を通じて成熟したことを明らかにした。また、『亜』の短詩運動を、その土壌となった大連という都市空間との関わりから検討し、文化的背景や社会情勢などの側面からその独自性の考察を行った。

第三部では満洲の日本人と「故郷喪失」について論じた。満洲事変から日中戦争へ移行する時期に、満洲で活発化していた「故郷喪失」と「満洲文学」または「建国文学」をめぐる問題系について述べ、満洲における日本語文学の展開を明らかにした。さらに、「満洲国」における日本語表現が統治形態や文化政策に規定されながらどのように展開し、満洲と日本の地政学的関係が、どのような文化戦略や摩擦を生み出したのかを検討した。

第一部で考察した関東大震災前後の詩と美術というジャンル間の越境と、第二部で検討した日本と満洲という地政学的な越境を接続することで、アヴァンギャルド芸術運動の本質、すなわち安定した言語形式からの脱却への意志を析出した。それを受けて、第三部では一九三〇年代から四〇年代の満洲において、「建国文学」（文学の安定した形式の希求）とアヴァンギャルド芸術運動（安定した言語形式の変革）が、それぞれ相反する方向性を志向しながら、しかし同じ「故郷喪失」という状況に帰結したことを明らかにした。

以上、本研究は三部構成で、一九二〇年代から三〇年代の前衛詩運動と満洲における日本語文学の展開を明らかにするものである。